熊谷蓮生一代記

一

L289
7

書庫

文化八辛未年新板繪入

熊谷蓮生一代記

全部 七冊

蓮生法師俗姓ハ武蔵の国の後人熊谷次郎直實と云源平の間小原ゟ武蔵の人也が頼朝道心を発し上洛して高水法然上人の御弟子となり出家して蓮生と名乗信心堅固なる事又類なく如来の御誓を蒙り上不拘楽天仏と迄なれり平生記の書也

11729

熊谷蓮生一代記序

蓮生ハ人俗称熊谷直實甫生於
文直貞平安錦街之東後移於東
武蔵郡初十六歳有郡芳門之
戦絶武名八荒之後武功雄偉世人
所以稱称賛也予嘗聞此事蒙此是

心身相傳方寸不昧數世若
恍然頓悟無常迅速之大義遂
禮吉水禪房剃髮受戒其
後以學問發之手精進不怠如
向我場之勇心生年創一書就
文之舊跡曰熊谷山法然寺宗祖
大師西印可如記此略事之書之年
建澤田氏義雪之為國字奏加
以點綴蓋為信者道世之通心矣
不文謝意澤田氏之序
編增之平園

維時文化六年歳次己巳四月

熊谷山法然寺五十九世

一厭叟

熊谷蓮生一代記大意

熊谷次郎直実蓮生一代記大意

桓武天皇十一代の後裔平治の乱に逃れ出家し蓮生と号す

三男永治元年の誕生なり七歳にして母と共に武蔵熊谷より久下権

次郎方へ成人十六歳にして保元の乱に義朝に従ひ平氏と相戦

都落門の軍に富士の名を挙げ治承四年十一月源頼朝に従ひ同年佐

竹冠者退治に名を元暦元年正月木曽の冠者義仲の討伐に功を同年

四月招聚一の名を賜ひ建久二年武蔵国熊谷郡に居住し同年十武

州と出て上洛し法然上人の門弟となり法力房蓮生と号し同年八月

十日遠国に下向し彼の所に於て厭穢土の方便を偈に又念仏千遍の

故実を述べる此時空者慈覚の耳と歌つ同七年又上京して同年二月法西

栗生に定住し地を築き五年の後建仁二年又関東に下り元

年又上洛して城南名所の里に居住し建永の頃に僧となる承久元

年より甚深第元元年九月四日蓮生坊行年七十五歳武州熊谷

若の名ゆへ上京文理生れ素懐を遂る後よ当世編年記るよハ矢尾あゝいづ
見ゆ次せん紙ゑ山書ハ偽文のごゝく記を遂ふ陽ゝ書ハ者れ事ゝ軍門戦場の事な
らば東西をゝく妻ゝ云ん傍家れ事ゝ小ハ基家ゝハ記せば次へ世当世の侵り
ゝんゝ経ゝ高ゝ殊ゝ記ゝる事ゝ流の一助ゝゝ計書ゝゝん人墓ゝ師が絵馬ノ
奇特をゝゝて佛道ゝ請ゝる事ゝ有ゝゝ人又ゝ佛ゝ帰せんゝ所望ゝ
ゝ書ゝ渡理ゝ求ゝて義ゝ為ゝ故ゝ友接ゝ別ゝ義ゝ深ゝ憑ゝ

文化七庚午仲秋日

陸東吉水葉　菖原齋仲通

熊谷蓮生一代記總目録

巻之一

熊谷次郎丹治直實家系之事
　并ニ弓矢丸誕生奇瑞之事
直貞猛然を討取事
　并ニ直貞家号を熊谷と改る事
直貞父子謀計ゝ落入付ゝ事
　并ニ久下権頭弓矢丸を召ゝ事

巻之二

弓矢丸熊谷直実と改名初陣ゝ名ゝ事
　并ニ老母直実ゝ養訓之事

熊谷宮濱川合戦之事
　并ニ小波郎出家搦捕と渡る事
源九郎義経一谷へ寄向之事
　并ニ鷲尾三郎義久ガ事
熊谷父子一谷魁之事
　并ニ出家者樂と同感と僞と事

巻之二

熊谷父子勇を揮事
　并ニ平山武者所言名ク事
九郎義経一谷逆落ス事
　并ニ平家西海の浦ふ渡ル事
熊谷出家之事敦盛と対面之起ク事
　并ニ敦盛遺言母衣の名ク事

熊谷軍中ヨリ嘶頻ヒの事
　并ニ義経出家ガ忠義を歎ヒ給ふ事

巻之三

熊谷直實敦盛の御首と送る事
　并ニ熊谷ガ娘の切来と云る事
熊谷檀那と界目宴編ク事
　并ニ出家ガ家の類を少と事
頻朝公熊谷ヨ暇ヒる事
　并ニ出家都ヨ志ス事
熊谷上京箱根ル一宿ク事
　并ニ出家者水面出家一蓮生とぬしる事

巻之五

月輪禪定法然上人を招請之事

并ニ蓮生坊累願を許さる事
法然上人降松樹を招請し給事
并ニ蓮生玉琴ふ敷墓の道を造る事
玉琴親子敷墓之を養ふ事
并ニ馬石敷墓と高野石碑し事
玉琴親子敷墓之を建事
并ニ御報堂を建立し給事

巻之六

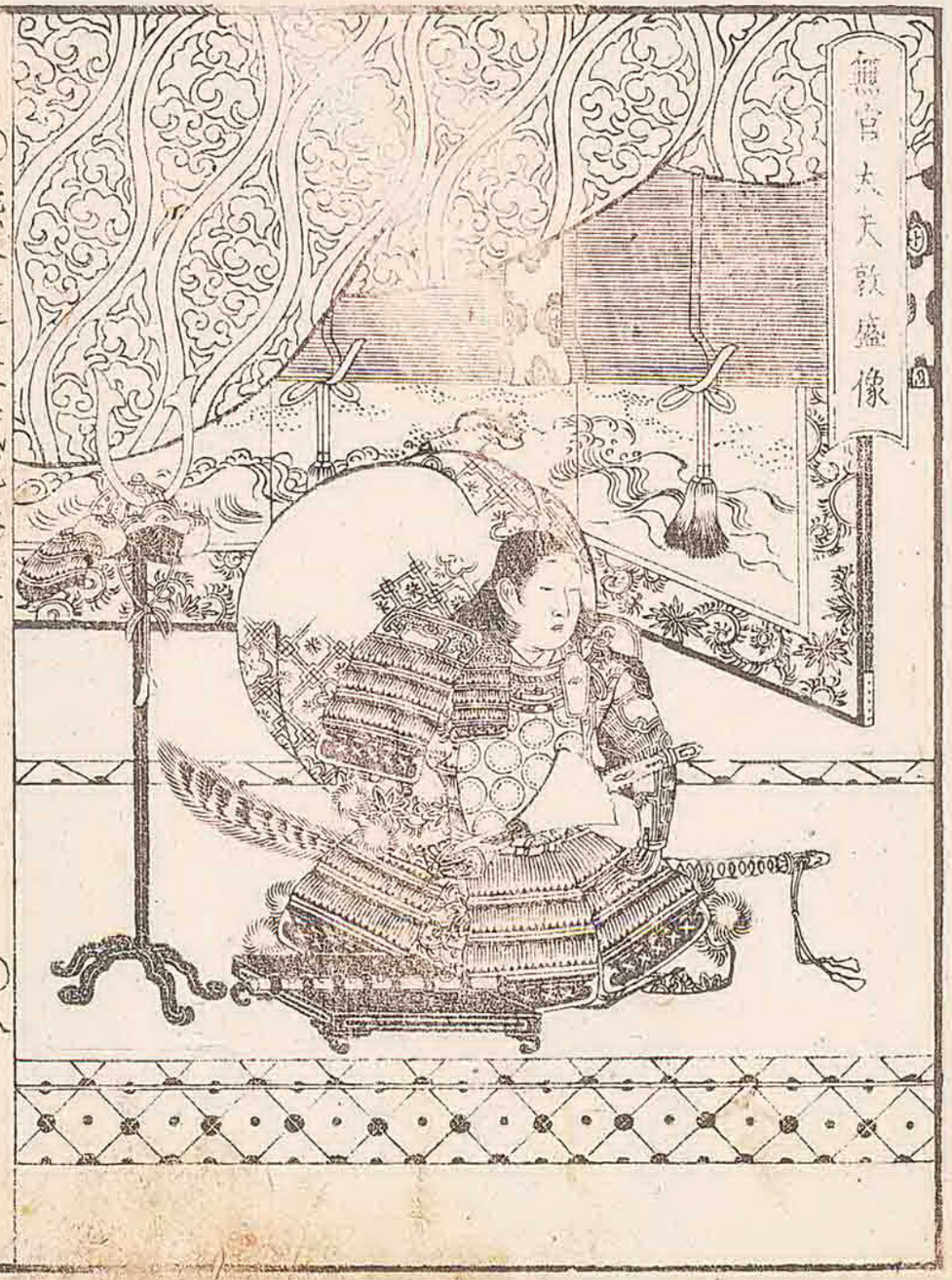
南都大佛殿造立し事
并ニ法然上人より招き給事
蓮生古郷へ下向し給事
并ニ同義枝宮と共に佛寺建し事
蓮生武藏野を立て津宮ふ部頼綱ふ対面し事
并ニ頼綱義弘対面し事
蓮生古郷へ立て老母ふ対面し事
并ニ蓮生法西栗生ふ同宿し事
頼朝公の尼御前蓮生ふ対面し事
并ニ法名授ける名号し事
熊谷の老母大往生し事

巻之七

蓮生武藏へ立て建立法然上人沙汰し給事
并ニ家極通法然寺霊場し事
蓮生高野へ登り給ふ事
并ニ上京蓮生数頼霊参し事
法然上人御歳参し事
并ニ上人蓮生ふ憂陀羅を授し給ふ事

空師信弘の弟を立門倍を伐ふる事
并に蓮生坊信の帰依する事
熊谷直家又入道を古郷へ迎ふる事
并に法然上人直家が孝心を感ずる事
蓮生村雨の帝よりの札を賜る事
并に件直家及一族へ遺書する事
蓮生再びこの札を立て大往生する事
并に上品往生奇瑞の事

熊谷次郎丹治直實像



直実賛

一ノ谷鵯門去功名亦不空
緇衣滅鉄城梵宮称英雄

鎌士吉

敦盛讃

城頭吹笛曉香骨沒芙蓉
流波沒骨萬古義名傳

鎌田活齋

直實畧系譜

○桓武天皇（人皇五十代）

一品式部卿 葛原親王
母夫多治比貞宗
參議長野女

仲野親王
母藤河子贈太政大臣

正四位下 刑部卿 茂世王

從四位下 右中將 好風

平中 貞文

高見王

從五位下 高望王

姓而賜平姓

中畧

鳥羽院北面
治郎大夫
直貞
姓改熊谷ト
為忠盛死

一男
直正
父同死

二男
直俊
父同死

三男
直實
小治郎
熊谷治郎
遁世而後號法力房蓮生

熊谷蓮生一代記卷之一

目録

熊谷次郎丹次直實家系之事
并ニ弓矢丸誕生奇瑞之事
直貞猛熊を討取事
并ニ直貞家號を熊谷と改る事
直貞父子謀よ落入討死事
并ニ久下權頭弓矢丸を養育する事

熊谷蓮生一代記卷之一

熊谷直實家系之事

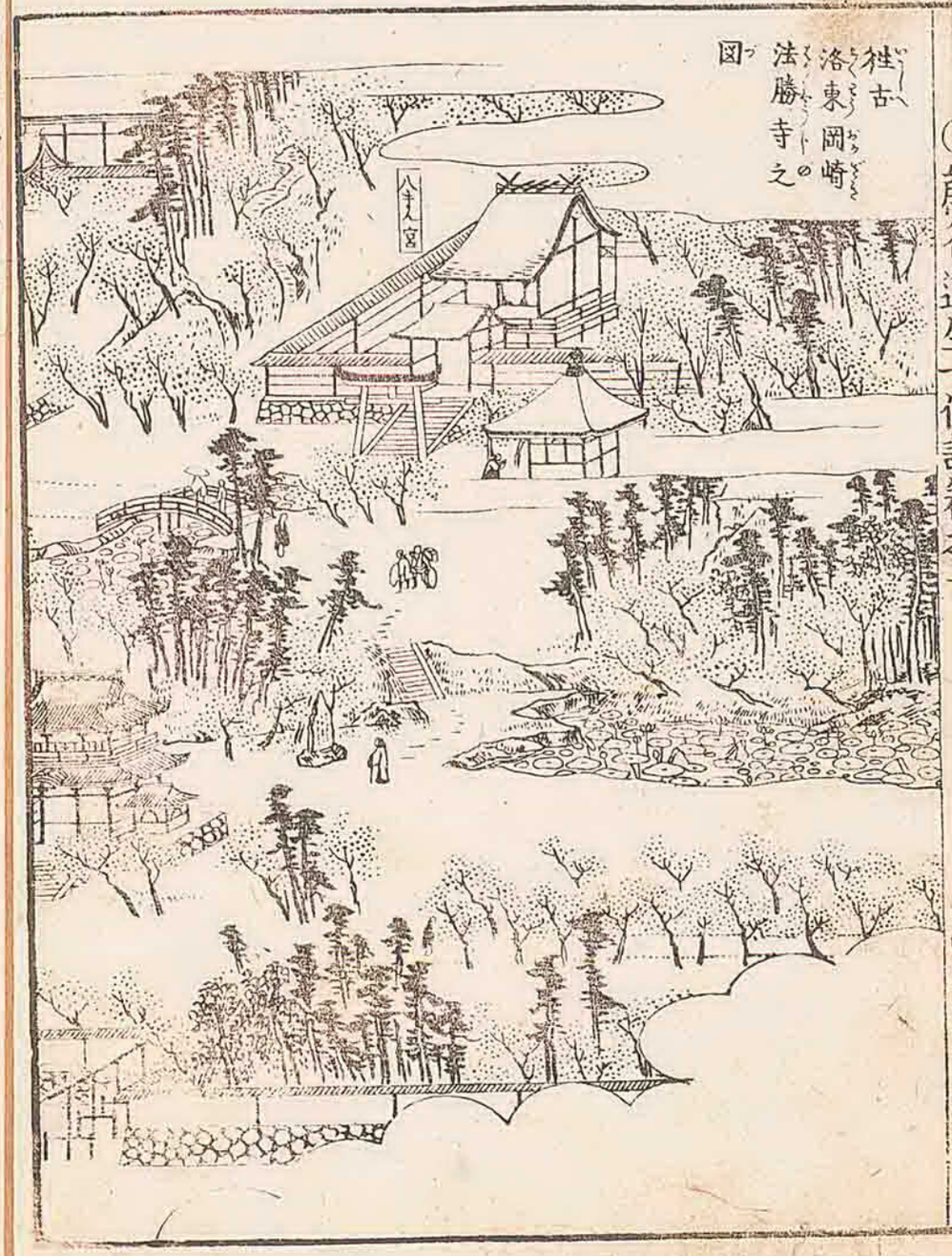
并弓矢九誕生奇瑞之事

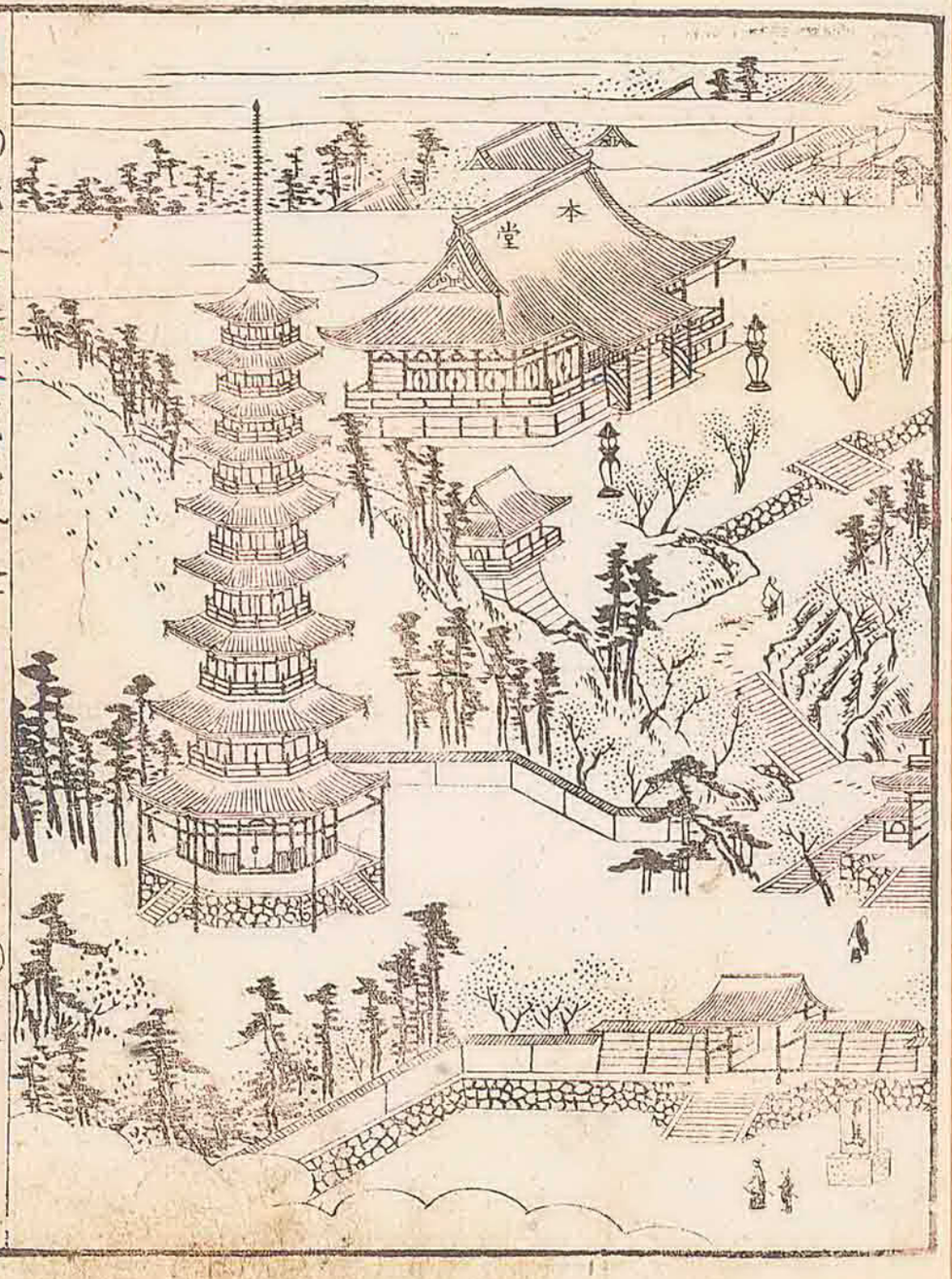
經曰武ハ是菩薩の行也干戈を以て佛事をなすなり仏祖の
うれ。真歸門を出ずして。俗歸恒沙の諸法を起ハ大乘至極の所
用なり。治財産業皆與實相を説きたるなり。士農工商乃道
さまぐなれども。武士ハ四民の長たるべし。一民三民を救ふ基也
然ども。弓箭刀杖を常にして殘害殺戮を事とする者を
真の武士ふ非ず。皆匹夫の勇なれば。仁義の武士ハ
却て一世を用ふ名を滅し名を稼のみならず多生無間の業
火身を燒。修羅圍陣の苦ふ沈淪する也。葛

崎玉郡熊谷莊の住人藤堂氏の旗頭熊谷次郎直實と
いふ武士あり。其先祖を尋ぬるに人皇五十代桓武天皇より十一代
の後裔にて。島羽院の北面高力次郎左衛門平直貞の三男母は
成末左衛門尉權頭の姉なり。實は母は姉なれども夫にして
子なきゆへ弟直貞二
人の男子あれども孤なるゆへ。何とぞ剛勇の一子を設くるひ
ゝ。爲ふ清水寺の觀音の法勝ちもの人皇七十二代白河院の
兼暦元年に御建立ましく。金堂講堂常行三昧横經
藏總社八十六坊に四面大門を義經ましく。
義を立し。本堂に鐘鼓を鑄かゝ。中門も八
角九重に塔婆は堅横ともに八十四丈にして。金剛
九會に曼荼羅を安置ス。實に三國無雙の大伽藍にて

遠ゝ望ゝ時は天竺の祇園精舎。震旦の昆明池。我朝の難波
の浦ふ蘆葦を写して人ゝ多ゝ。寺内に桜を植ゑ
頃は花一面の白雪にして其景色いつるもなり。
人ゝも此寺ふ詣て死を願て和歌を詠ず。
殊ゝ常寺は八幡宮は霊驗あらたにして。諸願もすみやかなれば
参詣老若のさんけい毎ふ絶ることなけれども。直貞夫婦ことに
御神ふ祈願をなして常ふ参詣とゝこびなり。其信心は殺生
ある教文婦の為ふ八幡大菩薩に弓矢を授るとなり。
たりそなたより美女たゞなれば矢と先月日を
治元年は二月十五日の早天よりむかふなる男子出生
ものゝ音ふ和田義盛は喜ことあまり。世ふ出家

往古洛東岡崎の法勝寺の図

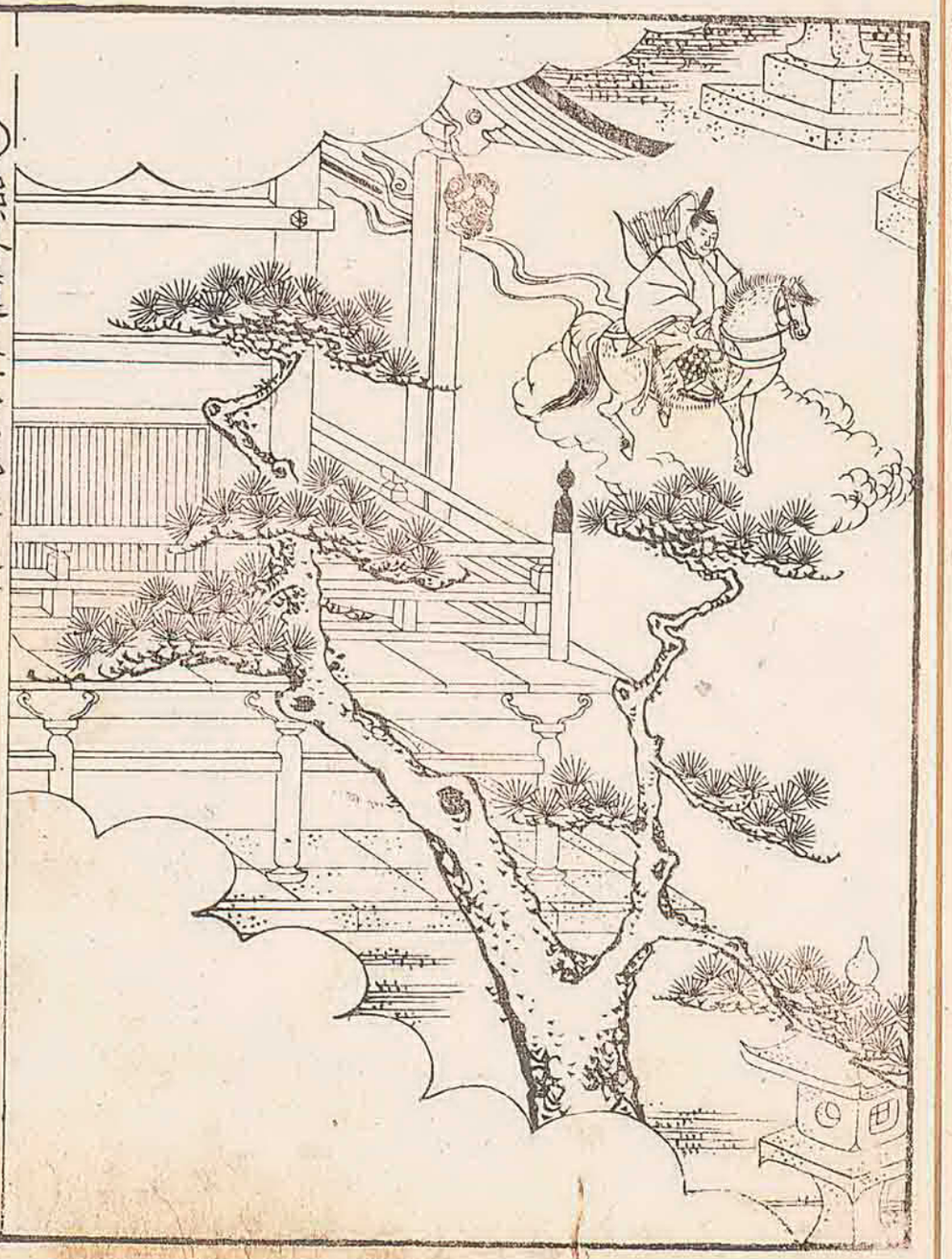




たるびんご白鳥一流流れて遠前乃梅の枝にぞまう
沢澤写ふ所ぞ見役彩りふうやき。七枝と種て天ゑ警
ろ人く寿美のなりひとたしけ。八幡宮ようり弓矢と拾ろ
とうて生まれて子たれた弓矢丸と名づけて夫婦ぐ
に奉をしるが。月日をかさねて直貞倩小四の弓を考る
小兒時人よあるぞ。成長の後ハ世ゑ名をあくべと。楽
書学しる。北ふ氏小四作馬ゑ鞍打ぬ沢ようり慮智みて。
動もそしだ西ふ知ひて合戦もるの癖あり。扨て源人
の後。鎌倉運生法師とハ。氏雅ゑ北事たりし。扨も名
備前守平忠盛。島羽院の御願みて。徳長寿院（今大佛
ゑ鞍馬山）
と造営して。三十三間堂を建。一千体の御仏を十人

なる。此身養ふて但馬守をあつう。上皇祈ゑ御願の祈
内北昇殿とゆるる。雲北上人を精ゑ祈る。同年十二月
廿三日。歳暮の節会の叙。忠盛と関対ふ せんと後せ。北面
の武士高力治郎左衛直貞ハ剛勇ゑ人ありだ。彼をかさふ
ぶしと警ふ直。右の後事を仰ゑ。直貞忠盛とハ同姓
なぐ。口ぶりより和れて有ゑ。二言ゑ多く。
北と風ゑ仰ぐ。すハ北上の一大事たりと。家の子。左兵
衛尉家盛ゑ孫を中会めて。事用しけるにより。家盛ゑ
て。人忠盛ふ義軽あるぞ。彼て殿上までも切上ん。
面流して辛り義ゑ。直貞も左人忠盛鬼神ふ。せよ
一対よせんとのとなぐ。和して出び岩ゑ。出ぞ絶よそのも

頼貞
八幡
霊夢
の
図



なるべし。其訳いかゝしくやゝふるうれど直貞ハ世を思ひ墨をこゝ
せんとしるる濃茶なりし若ゐを思ひ見とゝなして直貞へ対
ゆく恐をおよぼす事ハ唯へて術へ久ふより。直貞なるべふ直
正直後の二人の男子をもつるに。武蔵玉崎玉郡ハ配流せ
らるゝ。此時弓矢丸二歳ハ乳母ゆく かくしいるべきて
久下權頭が方へ養ふ養育しける

直貞種蒔を討取事

并に直貞家臣を然答と沒む事

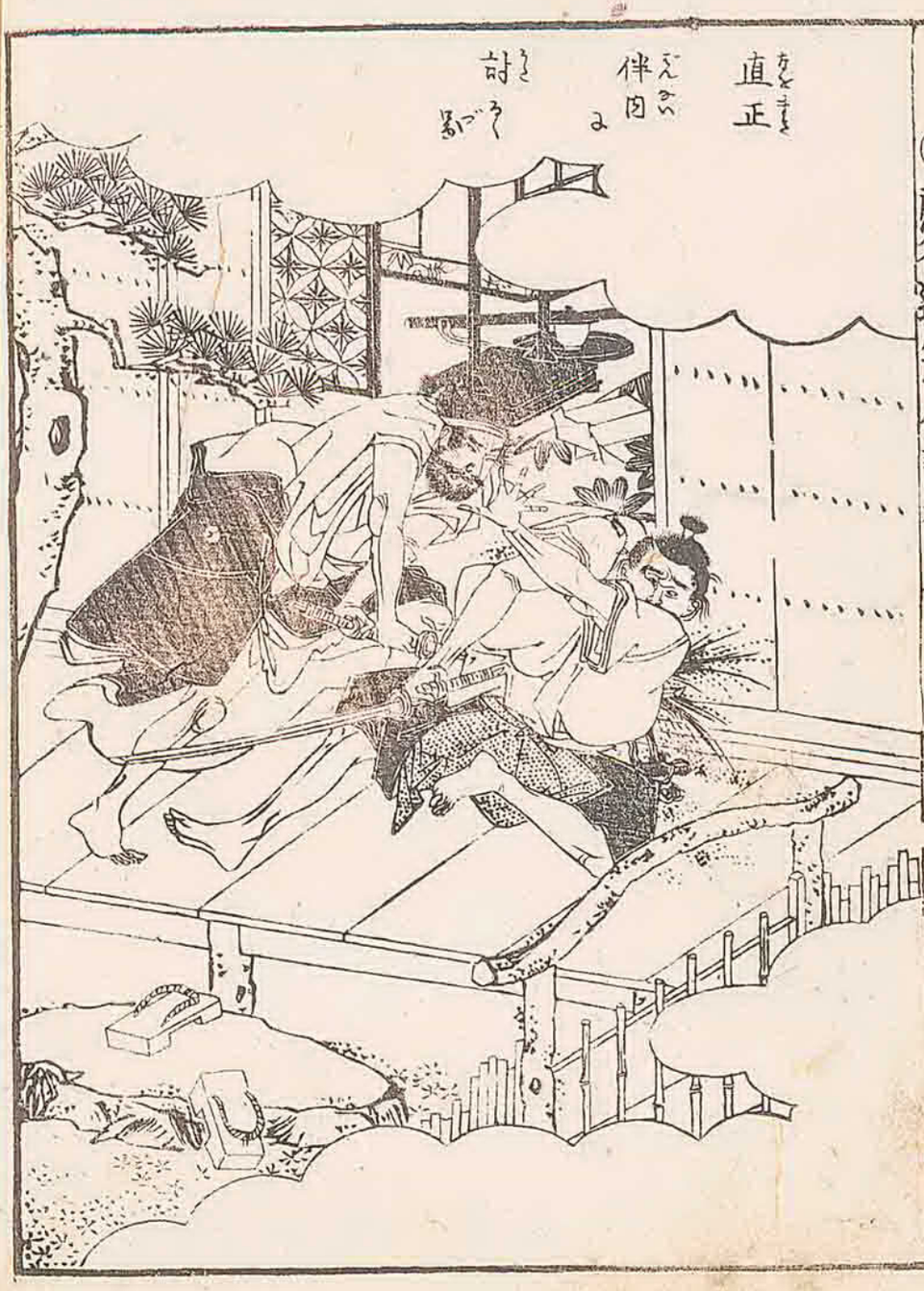
さしだるる刀直貞ハ少き人くの拔こふ顔ど。事なりと
去て。其刀ハ勿論二人の子息まで武州崎玉郡へ配流せ
る。妻子眷屬を悲しく歎くとゝ思ひより剃髮して直貞へ

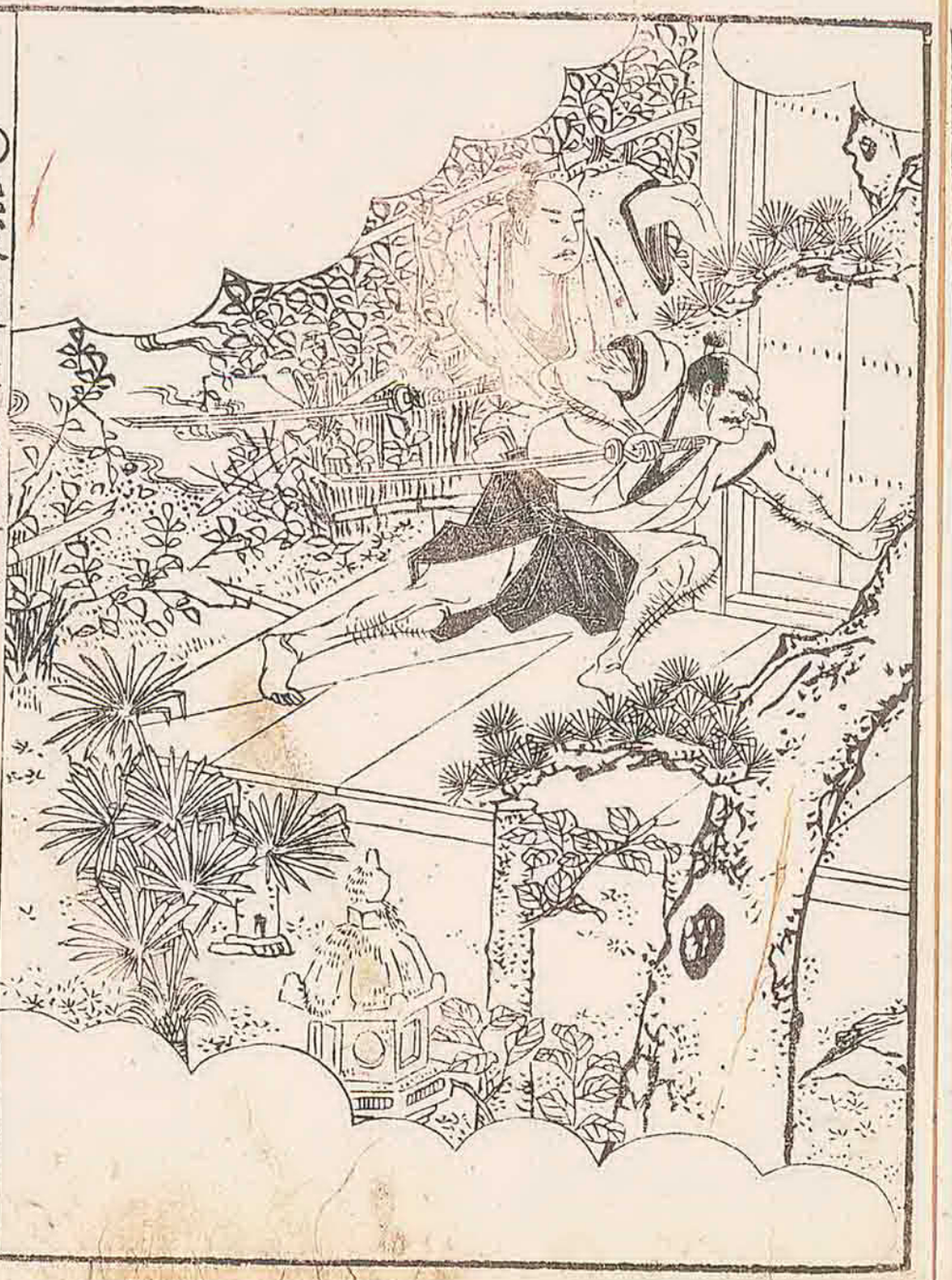
なるべ事なるべと慈悲の心ふて。是を歎くべ
ふ眼をさらし。ゆふふしてハ山野ハ獣を狩し。是を殺
らて月りを送るるゝ。てせ義盛ハて田畠をあしたの
多くれ人を養しるれば。農民を怖しなる慈ひしうべ。直さ
こしを乃ゆて安くべたらひ元より勇力たくまし乳者なれハ彼
種蒔と報して。人くれ害を除くんと弓矢を携へ山者とたづ
ねるるあ三りふなといへども。直貞ハ勇気なりや名を名乗よ
り会ず。又なまく山を行若ハかの種蒔ハ為ふ成と蒙う。或ハ乳
と名ふ。ふと驚くなるべ。直貞ハ是を名乗。此ハ大勢
の人数をいて山を狩出するべよりもや安ずしいるるなりまし。こ
村乃若ふ乃紅となりてうれ山を狩出さるゝ。義盛ハ平城の

直貞
猛獣と
仕上る

待受るふ。猪猿鬼こもるまで。大勢の勢ふ強く猛出る。
さしども直貞が此獅子ハ国もかけごと。かの義経の今や
来ると待受むふ乃山の書蔵より。さも大なるあ〻義経
長一丈余もあんと荒しくて。猛る者ハ山嶽とひびく也。一
さんよ猛り。其ゆ振大勢石の狗ひ動るが如く。勢子の者も
色をうて大よわを。肝をひや。我先ふて逃げ渡ることなふ。古来
につまづき岩角ふ五体と砕ふ。ハ多く落るもの。義
経ハ一さんよ平地をけて死来ると直貞ハ立て朝くる
事ちをバ矢ふ射ふ矢をとりけて切て強せばあやまぐすす
かのあ〻経のあ〻と射るこれも色を事も出ぬ。
より落ふを直貞これ。勢ひ射る強くして直貞目ゆ

かくと。解さうと直貞後ちる山乃とめをて。強弓も通を
と切伏しが矢盾石をおぐ〻。ふ中ふ〻めくふ〻くて
山乃の狗ふ〻ようきと射ふ。義ハ怒りて強しく
さしも直貞射をし乃射ふ〻ハ逃も道をあ石ふ死
畜せれあふ命と奪ふこと。ふ〻も情ふ〻。ふ〻ハ
逃ふ〻ふ。強ふ〻ふ命と奪ふこと必ふ〻ふ〻いふも
ふて道をこんぞやとひつの業の秘術をふして。二三度
左右すしける内ふ。直貞が運や強ふ〻ふん。後ちふ強ふ
ふつきふ〻ふ〻強ふ〻逃ふ〻ふ拍子。遠ふ〻合ふ〻義の月
の狗小突込ふ〻ふ。義経ハ多所をふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
に強ふて再び強出こんと狙ひふを。直貞突込ふ強


直正
伴内
討
熊谷蓮生一代記卷之一



と力よ仕せて。なをも無理して忍びて行く。希代の怪談
なりといへども。名家と云ふ事は。強よ思ひとおもひたつ
まうしで。直貞蘇生なる仏にして大よ怪び。却て直貞
直貞荒熊を云へめうと味ふ迄ちし勢ひ乃
者退くよ走り来り。此仲と云て。直貞が明雪の程を美
貞し。且ハ徒人の言を信きたりと怪ぶの限りなく。迚
色の無きまで。直貞が武雪を言を嚴て地獄領をれ
ひろ是より出と嘆で熊若こいへ。又直貞が家帰れる
力をわくとやて熊若こで名のりを。

直貞父子謀ふ落入討る事

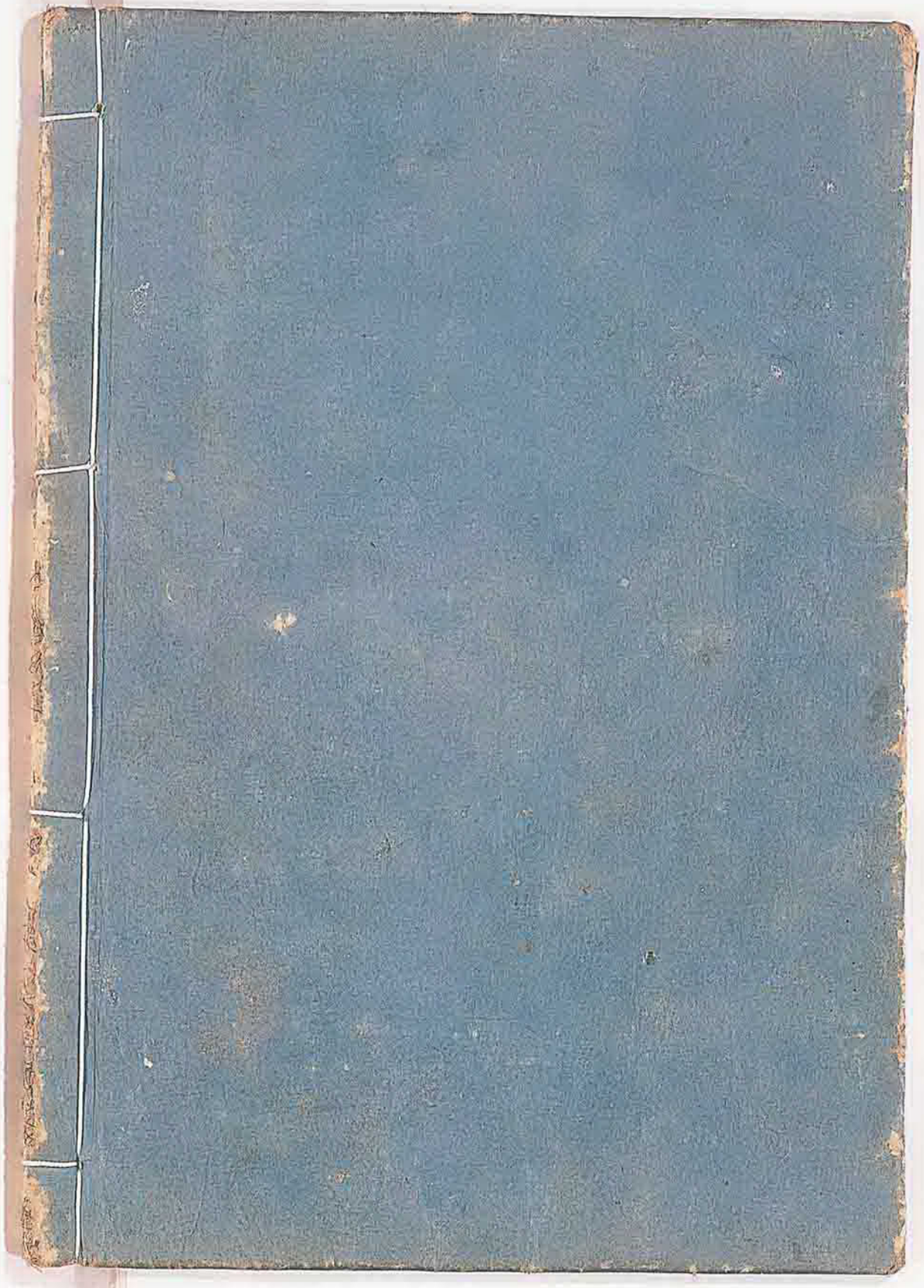
并ニ久下権頭弓矢丸を表言する事

斯て熊若ハ如何でも強く忠盛こ仕をて。かる明雪此直貞を
此仕を捨おうば後ふ我こが家の害とる人を思ひ。よしさハ
ちくとも。一旦我と害せんと謀儀し曲者其侍ふ捨金ハ石を懸て
測よ入ちり。者ぐ侍を以て彼ふ親ふと討ふ人と言ふ郎ふ
左衛門尉家ふと捨さ。右の仕事をかくし久を。
捨并ニ郎同三郎の兄弟此者とかくし。武蔵ふ上り熊若の
迎道ふ思ひ居て。日秋直貞と狙ひ居る。武日直貞と儀と
繪小島持ふ出けるとを。少て其帰を討ん用意とす
夕方より三人歩連村端より十丁ばかり義ふ森の内
にまぶして家ひ居る。斯ともまぐと直貞襲る。日もう
陽に及ぶ。いざ帰らんと歩連て来かる不を右衛門家

給ひすまして弱矢直貞ぐたの脇肋よりつらぬき立刎乱の直貞甚疵汗ほふ者とめをと接。分ゲまへせんとちらしでも元より数所の痛めちらしで。何うへいてたまるべき。尻居ふでふで倒々ふ。主像ゑるようおの是曲者逃さじと。林の中へ駈入んとする所を横井治郎が夫矢ふ直像が胴板と射ぬきをしバ。同じ板より出るより。林乃中より三人が踊出て。直貞釈ふにそむとさし。まより直貞が座敷に出り。惠ふ出り。根毅の生垣押破り入り。築ひ乱れ入り家ひ入るふ。主ひ出ぬ出ぬ。ようの病ふ犯られ難を有ふ卯居けると。横井三郎まちをいて。直正が脇のつぶひを射ぬ是バ。主正何者と立あがんとすれ共。是たされバ後方なく抜をれ刀抜ぬ。横井へ遠出る所。三人めをつを付てかれバ。主ひん

得身を背け。やくもんせず拂切よ三郎が弱腰ふ切込バ二ちのなりて死しるバ。ふ郎よくをを入ふ。さんぞを直正病家ひ入へふ矢とおひるをを是バ。ふ郎ちたを二人の者ふ斬伏ら是。終ふ切なくなりふる。家来横井ハ三郎と射ぬ是ぬ。直貞釈ふと言せををんだ。ふ郎ふ帰忠盛ふ右の由とふ。ふ郎大ふ怒び二人の者ふ命ふ是ぬ。忠盛是ふ聞ぬ。直貞が幸ふ。弓矢丸と乳母なる若殿し。久下権頭ゲ方ふ出ひ殺る由を聞。石ひして涙ふ言せんとやをれをを。門脇中納言教盛経理ふ是ふ絶盛ハ世ふ情深き人をを是バ。ふるをとをて不仮ふ。ふ人ふ合せ右墨へ幸ひふ是ふ長をて尋三詣て

雅き者の一命を乞ふ。さすがに忠臣も有人の詞にかゞく雅者の命を助け。又が配所熊谷へ遣はすべきとぞ申されける。則權頭を召て雅者乃一命ハ我こゝろにうけ給はるべし。彼が母堂を同国に連くだりて。懇ろに養育つゝ成長せ後ハ出家とすべし。親ゝの業報と思ふらんにより。無量の善根ありけるゆゑ。權頭かゞ仰を承て。涙ひゝ和て首尾ゝ。漸よ篠堂熊谷熊谷即丹治直實とぞ。此雅者の生涯なり

熊谷蓮生一代記巻之一終

慶應二年
寅十月 求之
相伝 武州 岩川村
熊谷伊